

13) トルコ鞍近傍の MRI

— 正常例を中心に —

伊藤 寿介・横山恵美子 (新潟大学歯学部
登木口 進 (歯科放射線科))

黒木 瑞雄 (脳研脳神経外科)

磁気共鳴画像を用いてトルコ鞍およびその近傍の解剖学的構築がどの程度描出されるか検討した。本学学生15名、他のボランティア4名が対象である。使用機器はシーメンス社製超伝導型 MR 装置。静磁場強度は1.5テスラで用いた撮像法は short spin echo 法でパルス系列は TR=600msec, TE=15msec である。スライス幅は5mm 15例, 3mm 4例で、撮像方向は軸位像、前額断像、矢状断像である。下垂体の前葉、後葉、下垂体柄、視索、視交叉、視神経、乳頭体、灰白隆起、視交叉陥凹、漏斗陥凹、三叉神経根、三叉神経節、海綿静脈洞は殆んど症例でよく描出された。動眼神経がクモ膜下腔を走る部分で描出される症例があった。Gadtrinium-DTPA を用いた1例では海綿静脈洞内の動眼神経を同定出来た。内頸動脈は頸動脈管から頭蓋内の部分までよく描出された。卵円孔が同定出来た症例もあった。外転神経、棘孔は同定出来なかった。

特 別 講 演

MRI による脊椎・脊髄の画像診断

熊本大学医学部放射線医学教室

教授 高橋 睦 正 先生

第10回新潟てんかん懇話会

日 時 昭和63年10月15日(土)

場 所 有任記念館

一 般 講 演

1) てんかんセンターとしての5年の歩みと
その実態金子 晃一・田村 絹代 (国立療養所)
笹川 睦男・長谷川精一 (寺泊病院)
梶 鎮夫

国立療養所寺泊病院は、昭和58年5月からてんかんセンターとして、新潟県を中心とした東北地方日本海側および北陸地方を対象として活動を開始した。5年を経過した現在、これまで当院を受診した患者について若干の分析を試みた。対象は、昭和58年5月より昭和63年4月30日までに当院を受診した1367名と、それ以前に当院

において加療されていたてんかん患者159名を加えた1526名である。そのうち男性834名(55%)、女性692名(45%)である。

年次別新患患者数は昭和59年の365名を最高として、以下年を追うごとに減少している。

他医療機関からの紹介患者は1038名(68%)で、紹介なしに当院を受診した患者は488名(32%)である。治療歴のある患者は1295名(85%)にものぼり、初診の患者は231名(15%)に過ぎない。現在引き続き通院している患者は534名(35%)であり、また1回の診療で他の医療機関へ紹介した患者は654名(43%)と多い。

紹介してきた医療機関は精神科(40%)、小児科(28%)が多い。

来院患者の地域分布は、県内が90%を占めている。同じ国立てんかんセンターである静岡東病院では県外が75%である。県内で多いのは巻・三条(22%)、長岡(16%)、新潟(13%)であり、当院の近接地域が多い。県外から受診した160名は山形、群馬、長野、富山など新潟近県からと、関東圏が多い。

初診時の年齢分布は全1526名中、6~10歳が330名(22%)、11~15歳が244名(16%)と、就学時年齢が全体の38%と多い。

診断は、てんかんが1177名(77%)、非てんかんが315名(23%)である。てんかん類型は、原発全般が15%、続発全般が11%、部分てんかんが65%である。部分てんかんのうち側頭葉てんかんは294名、非側頭葉てんかんは471名である。ガストーの結果と比較すると当院では原発全般てんかんが少なく、続発全般と部分てんかんが多いが、難治性の患者が多く紹介されてくる当院の性格と関連があるものと思われる。

重複障害では、精神遅滞が26%、脳性麻痺が1%、その両方を合併しているのが6%とかなり高い数字であるが、これは近隣に重症心身障害者療育施設を持つ当院の立地条件によるものと思われる。

当院において1年以上加療した694名についてその治療成績についてみると、完全抑制48%、75%以上の抑制17%、50%以上の抑制12%、不変・悪化23%で約7割弱が75%以上抑制できている。てんかん類型別では、原発全般てんかんが一番良く、続発全般が一番悪い。部分てんかんで、側頭葉てんかんは完全抑制が28%、非側頭葉では54%で、側頭葉てんかんの方が治療成績が悪い。

投与薬剤数は、1剤投与が35%、2剤投与29%、3剤25%、4剤8%、5剤3%で、平均2.2剤である。原発全般てんかんでは平均1.5剤と少なく、続発全般は平均2.7剤と多い。また、側頭葉てんかんでは平均2.4剤、非側

頭葉では平均2.1剤と、難治の傾向のある側頭葉てんかんで多剤投与がされている。

てんかんセンター開設以来5年間に1526名が受診しそのうち県内が1366名である。これは新潟県内推定てんかん患者数の1/10に相当する。これら患者について若干の分析を試みたが、てんかんセンターであるため難治が多い片寄った結果である可能性は高いものと思われる。

2) 当院における定型欠神発作の脳波学的・臨床的検討

渡辺 徹・石塚 利江 (新潟市民病院)
佐藤 雅久・阿部 時也 (小児科)
小田 良彦

定型欠神発作は、突然の意識消失および回復、脳波上、左右対称性の3c/s spike and wave complexを特徴とする発作群である。従来予後良好の疾患と考えられてきたが、最近、かならずしも予後良好ではないといわれている。今回我々は、定型欠神発作の予後を検討するために、当科通院中の本症25例について初発年令発作型、熱性けいれんの既往、治療に対する反応、脳波改善までの期間等につき検討した。

- 1) 初発年令は2才6ヶ月から11才まで、平均7才8ヶ月であったうち4才から9才までが22例と、88%をしめた。男女比は1:4で女兒に多かった。経過観察年数は、1年4ヶ月から10年3ヶ月まで、平均4年5ヶ月であった。
- 2) 発作型は、23例が単純型で、間代欠神、自動症欠神が各1例であった。一般には複雑欠神が圧倒的に多いといわれており、軽微な随伴症状を見逃していた可能性がある。大発作の合併は1例のみであった。
- 3) 熱性けいれんの既往は13例中5例にみとめ、一般集団に比し、高い率を示していた。予後との関係は明らかでなかった。
- 4) 知能障害、けいれん性疾患の家族歴を認めた例はなかった。
- 5) 全例で発作の消失を見た。うち22例が1年以内と、比較的早期に消失していた。
- 6) 3c/s spike and wave complexは全例で消失した。うち1年以内に消失したものは、14例のみで、発作消失期間に比し、やや遅れていた。

3) 前頭部にてんかん波を有するけいれん児の検討

佐藤 雅久・石塚 利江 (新潟市民病院)
渡辺 徹・阿部 時也 (小児科)
小田 良彦

日常臨床に於いて、前頭部にてんかん波を有する例は比較的稀である。そして、その発作症状も発熱時の痙攣のみの例から、小児期の良性部分てんかに類似した経過をとるもの、激しい運動性の自動症を伴い前頭葉てんかに分類されるものなど、種々の病態を含んでいる。今回我々は昭和49年6月より60年7月までの11年1ヶ月間に当科を受診し、発作間歇期脳波記録で前頭部に狭義のてんかん波を認めた例を、臨床的、脳波的に検討し報告した。

- ① 対象は17例で、男11例、女6例であった。
- ② 最終観察時年令は、4才7ヶ月より20才1ヶ月で平均11才6ヶ月であった。
- ③ 経過観察年数は、1年10ヶ月より14年2ヶ月で平均6年2ヶ月であった。
- ④ 痙攣発作の初発年令は、5ヶ月より14才1ヶ月まで幅広く分布し、平均4才1ヶ月であった。しかし、6才以下の発症が17例中14例と多く認められた。
- ⑤ 熱性痙攣の既往歴を、確認し得た15例中10例と高率に認めた。
- ⑥ 発作分類では、
 - 1) てんかん疑い(発熱時痙攣のみ) : 4例
 - 2) 複雑部分発作(以下CPS) : 9例
(全身痙攣(以下GS)合併例 : 4例)
 - 3) 全身痙攣のみ : 4例
 であった。
- ⑦ 各発作型の予後を、発作消失までの期間で比較すると、てんかんの疑いの4例は、全例抗痙攣剤服薬後発作が消失した。しかし、CPSの9例では、GSを合併しなかった5例は容易に抑制されたが、GSを合併した4例は抑制までに1年から13年1ヶ月を要した。GSのみの例も容易に抑制された。自動症の有無にかかわらず、GS合併例は比較的治療抵抗性であった。
- ⑧ てんかん波の焦点部位は、
 - 1) 他部位より前頭部へ移行した例 : 8例
 - 2) 前頭部のみ : 5例
 - 3) 前頭部と後頭部に同時に認められる例 : 4例
 であった。

特別講演

てんかんの予後と治療をめぐって

弘前大学医学部 神経精神科

福島 裕 先生